

『主体的・対話的で深い学び』の授業実践を振り返って

〇〇〇〇高等学校
 〇〇科 〇〇 〇〇

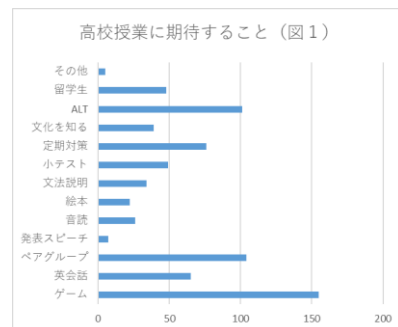
1. はじめに

今回、資質・能力育成研究会（授業研究部門）授業研修会に参加したことで、複雑化し、予測困難となるこれからの社会に生きる生徒が、身につけておきたい力は何か、について改めて考える機会が与えられたと感じている。“世の中を生き抜くために必要な力を身につける”という教育の基本理念を根底に据え、時代の変化に対応しつつも、一過性の実践にならないように留意して、この1年間取り組んできた。「主体的・対話的で深い学び」を意識して4月から実践した内容を、以下にまとめていきたいと思う。

2. 授業実践報告

1) 課題の把握と解決の手立て

まず、4月に行った授業アンケートを元に、新入生が高校の授業に求めるものを把握した（図1）。圧倒的に「ゲーム」や「ALTとの授業」、「定期考査対策」という目先の楽しさや即効性を期待する姿勢が強く、「文化を知る」や「自分の考えを発表/スピーチする」等の、教養や思考を深めるといった生涯を通じて高めていきたい力に関しては関心が低いことが分かった。課題としては「学んだことが社会で生かされるという感覚がなく、英語を学ぶ動機付けに乏しい。英語に対する苦手意識があり、様々な事柄に対して考えたり、意見を表現したりする機会が少ない」ことが考えられた。そこで、本校の Can-Do 目標の一部である“積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢”の育成も意識し、①実生活の場面に基づいた実践的な実技（パフォーマンステスト）の定期的実施により、学んだことが中長期的に社会で生かされる感覚を持たせる、②他教科との連携、外部機関活用を積極的に行い、学んだ知識を相互に結びつけて思考を深め、表現する場面を設ける、③ペア・グループワークを頻用し協同する姿勢を養う、の3点を手立てとした。



2) 実際の取り組み

表1に、各レッスン(章)の取り組みの主な内容をまとめた。これらの取り組みを一過性もので終わらせないために、授業のベースである教科書の内容に基づいて、活動を絡み合わせるようにした。また、各章に繋がりを持たせ、次第に難易度を上げていくように工夫した。特筆したいのは、地元

表1

章	章の概要	主な実践内容	実技テスト内容
1	日本のおもてなしについて 日本と諸外国との違い	他教科(国語科)連携 茶道体験(外部機関) 国際ユース作文コンテスト	観光案内所職員として 観光客に助言をする (集団面接形式)
2	身近な事柄や習慣の成り立ちについて	学科(工業部)連携 自らの学科の事柄を調べる	朗読寸劇(スキット)
3	海外で人気の弁当文化について	外部機関(地元企業で働く 外国人労働者)活用	外国人労働者のインタビューし、その内容を基に海外で売れる弁当をプレゼン
4	老亀と幼カバの種を超えた友情	他教科(芸術科)連携 ミニブック作成	創作劇
5	冒険家ノンフィクション作家が若者に送るメッセージ	図書館活用(英語フェア)	YouTuberとして冒険企画案を議論

企業の外国人労働者を活用した授業である。漠然とした国際交流で終わらないよう腐心し、事前に教科

書で学んだ事を元に、実際に外国人にインタビューをして、書かれている内容が事実であることを検証するという機会に設定した（手立て②）。さらに自分の耳で実際に聞いたことを元に、外国で売れる弁当メニューを考え、プレゼンをするという流れを作ることによって、学んだことが実際に社会で生かされる感覚（手立て①）を少しでも身につけることができたのではないかと思う。また、授業では必ずペア・グループ活動を取り入れ、教師1対生徒40の時間を少しでも削減し、実技考査は必ずグループで行った（手立て③）。このことで、自分とは異なる他者と、どう上手く折り合いをつけてやっていくかが試される場面を体験する機会が増えたと思う。公開授業は、芸術科との連携授業を行ったが、事前に三科目（音楽・美術・書道）選択生が必ず混ざるようなグループ分けをし、互いに学び合う環境を整えた。それまでの実技で、すでに寸劇や発表を数回行ってきた後ということもあり、この芸術三科目と連携したクラス全体での創作劇は、どのクラスもなかなか見応えあるものとなったことをここに記しておきたい。

3. 生徒の反応（アンケート結果より）

2学期の最初に行ったアンケートでは、早くも実技考査への生徒の前向きな反応が表れた。表2-1は、実技考査に真面目に取り組んだと答えた生徒が「あてはまる」「ややあてはまる」を含め9割近くいることを示している。ペア・グループ活動も好評で9割を超える生徒が楽しいと答え（表2-2）、入学前に比べて英語を話す・聞く量が増えたと答えた生徒は84%（表2-3）で、英語活動が多い中学校と比較しての数値としてはまずまずだと感じた。11月に県北地区の中高合同研修会が本校で開かれたが、その際、実技考査のビデオの一部をご覧になった中学校の先生方から「生徒が楽しそうに活動している。」「鍛えていただいてありがたい。」等、好意的な反応を頂いた。前述の国際交流授業は、テレビの取材も入ったのだが、ある生徒が「今まで習ってきた英語がここまで通じることが分かった」と話し、実体験の大切さを実感した次第である。

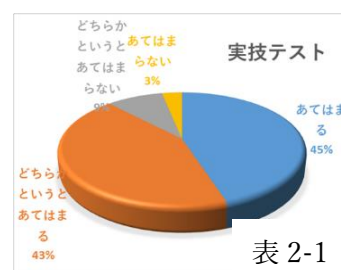


表 2-1

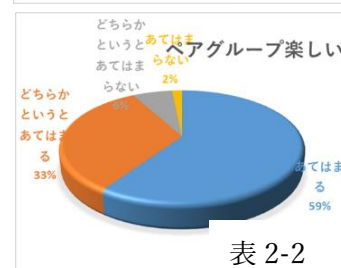


表 2-2

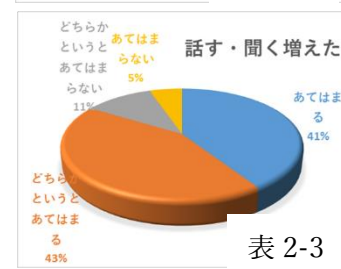


表 2-3

4. おわりに

「主体的で対話的で深い学び」をどう授業の中で展開するかについては、教員一人ひとりで捉え方が異なり、学校や生徒によって実践内容が変わるのは当然なので、この「主体的で～学び」について、私自身が一つの明確な答えが導き出せたわけでは決してない。しかし、今回実感したことは、単に英文を読んで内容を理解して終わり、という授業では深い理解にはならず、その内容を元に様々な切り口から考えたり、表現したりする機会を多く設けることが、さらに内容を深く理解する手助けになるということである。英語を話せない日本人が多いと言われ続けているが、“話せない”のではなく、“話すことがない”というのが実態なのではないか、と感じることも多い。先日も日本人は「読解力」が低いとのPISAの結果をメディアが報じたが、これを国語教育のせいと結論づけるのはあまりに拙速で、確かな読解力はあらゆる教科のあらゆる教育活動に関わるものと捉えるべきだと思う。その意味で、英語教育も、英語そのものを学ぶ、英語で何かを考える、英語を読んで物事を考え表現する、他者と協力してツールとしての英語を生かして何かを創造するといった諸々の活動がすべて教育実践だと言えよう。これからの英語教員はこれらをどうコーディネートして授業を組み立てていくかを考えることが求められていると考えている。